悟りに至る大いなる道草

　イギリス留学から帰国し、大学で教えている健三はある日、すでに「縁を切った」はずの養父島田と会う。島田は、十数年の歳月の間に大いに境遇がかわった健三の生活に介入し、生活費を要求するようになる。妻の父親や姉夫婦にも金を用立てている健三は、そんな義理はないと思いつつも、その要求を拒みきれない。島田は健三にとって「過去の幽霊」であり、健三は疎遠になっていた姉や兄との関係や自分の不愉快な過去を意識せざるを得なくなる。目下、妻との関係は冷え切っており、子どもに対しても、父親らしい感情を抱けずにいる健三は身勝手な性分ゆえ、人間関係全般に齟齬をきたしている。

　健三は漱石の分身的人物であり、生まれてすぐに里子に出された漱石自身の経験やトラウマの反映が見られる。その後、養父母が離婚し、漱石は養母とともに実家に戻ったものの、養子縁組の関係は正式に解消されないままに成人したのちも、漱石は養父に金銭をせびられていた。漱石はあたかも夏目金之助と言う自らの本名に呪われていたかのように金に悩まされていた。「道草」は漱石自身の過去を洗い出す生々しさを伴いつつ金銭の授受という下世話な営みを通じて、家族、自分の過去、人間関係を捉える奇妙な経済小説となった。

　養子縁組は明治、大正期の社会や家族を考察する上で避けては通れない。生みの親に育てられるのが当たり前と言う現代の感覚とのズレを埋め合わせなければならない。後継ぎ以外の男子はしばしば養子に出されるのだが、養父母の老後の面倒を見るとか、家業を盛り上げるとか、特定の相手と結婚するといった見返りを求められた。養育は無償の贈与等ではなく、対価としての恩返しが暗黙の了解だった。養子は実質、債務者であり、家の存続の義務を追い、それが果たせない場合、親子関係が解消される冷徹な契約だった。実家と養家の間で取引される物品のような扱いを受けた健三は養父の無心によって、無意識に封印していた自分自身のトラウマと直面させられる。消せない過去の記憶、記録(証文)が反芻され、健三は否応なく、何をしに世の中に生まれてきたのかと言う存在論的不安に晒されることになる。

　金が物品の貸し借りはごく日常的な応酬だが、健三を不安にさせるのは契約では割り切れない情なのだ。健三は兄や兄嫁との関係においても傷ついている。自分がもらえるはずだった時計が兄の手に渡ったことや、兄が三度目の妻を迎える時、弟である自分に何の相談もなかったことへの不満を引きずり、義姉に冷たく当たったり、「親身の兄や姉に対して愛想をつかすことが、彼らにとって一番ひどい刑罰に違いなかろう」と思ったりする。
この謙三の屈折もどうやら養子に出されたことに由来するようだ。養父島田は健三に本の一冊でも書けば、それが資本になり、自動的に金が入ってくるといい、健三自身も金蔓に

仕立てる算段までする。関係が疎遠になっても、養子縁組の契約は有効で、健三が島田にとっての投資物件であることに変わりは無い。だが、健三にしてみれば、養子に出されたこと自体の理不尽に、その負債の返済を迫られる理不尽が重なる。健三は一枚の書付を百円で買い、それを反故することで養父との関係を断とうとするのだが、「何処迄此影が己の身体に付いて回るのだろう」と言う不安は拭い去れない。数字の上では帳尻が合うかに見えるが、それでは片付かない何かが残る人は貨幣ではないので、過去の清算は収支決算のようにはいかないのだ。

貨幣それ自体は何ら価値を持たず、交換の営みにおいてのみ価値を持つ。それはある程度まで人にも当てはまる。人の価値を決める尺度に、信頼性や将来性、甲斐性あるいは生涯賃金などの用語があり、それは額面で示されもする。もっとも、経済活動自体が関係を交換によって営まれるので、人の価値も人間関係をいかに構築するか、どういう交換の営みに参加できるかによって決まる。島田が現れる前の健三は妻や兄姉とも不和で、誰に対しても心を開かず、著作を世に問い、他者と認識を共有しようともしていなかった。いわば不人情の極みにあったので、自己確認の術を一切持たなかった。そこに養父が現れたことで、健三は嫌々ながら過去の自分を辿り、おぼろげながら、今の自分を関係の網の目の中に位置づけることを余儀なくされる。

過去と言うものはアルバムのように、在りし日のままに永久保存できるものではなく、歴史がしばしば修正されるのに似て、隠 〇、抹消、捏造が施され、その都度、更新されたり、書き換えられたりするものである。過去はその人を形成する要素であり、関係によって規定されているも以上、それぞれの思惑に応じて、変わっていかざるを得ない。人は自分の記憶を縒り合わせ、「自己」を書き上げようとするが、他者の介入によって、それも思い通りには行かない。だが、「自己」とはもともと、無数の他者との関係、その人を取り巻く環境や現象が複雑にからみあった結果である。とにもかくにもそれを認めないことには自己認識に向けた一歩踏み出すことすらできないのである。その境地に達するまで、健三は大いなる道草を食ったことになるのだが、最後の最後に至って、「世の中に片付くものなんてものは殆どありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞいろいろな形に変わるから他にも自分にもわからなくなる丈の事さ」と悟ることができた
陰々滅々とネガティブな要素ばかりで押してくる「道草」は、健三がこの境地に達したことでかろうじてハッピーエンドになっている。